

# 史跡通信

- 仙台藩白老元陣屋の整備事業に関する出来事をお届け -

## 新たな文書資料を発見

仙台藩士の足跡はまだ不明の事柄も多く、白老町では継続的に文書や絵図面資料の調査を行っています。令和5(2023)年度の調査では、宮城県大崎市で新たに『佐藤家文書』を確認することができました。

佐藤家は大崎市(合併前の古川市)にあった旧家で、地元では「佐藤様」と呼ばれる相当の名士であったようです。東日本大震災で所有し続けることが困難になり、大崎市へ寄贈されることとなりました。

仙台藩士の任務に関する文書は12点で、道東へ赴任した小児科医の山本立庵が縁戚となった佐藤家へ宛てた書簡等でした。白老町ではさっそく大崎市の了承を得て、資料の翻刻に取り組んでいます。実際に蝦夷地に派遣された人物で、個人レベルで動向を知れる文書はとても貴重です。

白老町ではまだ詳細を把握できていませんが、大崎市とは他の文書資料についても情報交換を行っていますので、翻刻の成果や進展具合は改めてお知らせします。

## 三好監物の歌碑

陣屋跡は東西を小高い大地に挟まれた地形を選んで造営され、藩士たちは塩釜神社と愛宕神社から祭神を勧請して任務に励みました。西側の台地の麓には、白老元陣屋の2代目の御備頭(武士団の統括者)であった三好監物が、赴任中に詠んだ短歌を記した歌碑が建立されています。「宮柱 太しく建てて 祈りける 照日のおかに 君が八千代を」。任務にあたる決意と君主の繁栄を祈願した短歌で、幕末の探検家であった松浦武四郎の日記でも触れられています。

歌碑の建立は昭和44(1969)年、史跡周辺に居住し、「白老仙台藩陣屋史跡保存会」として保全活動等を日々行っていた方々の発意により実現しました(歌碑が建立された一帯は、同51年の追加指定によって史跡指定地に含まれています)。除幕式は塩釜神社の例大祭である7月10日にあわせ、宮城県仙台市から三好監物の子孫も招いて執り行なわれました。

令和5年度の発掘調査が終了。成果は…

史跡白老仙台藩陣屋跡では環境整備事業に向けた発掘調査を令和4(2022)年度より継続しています。2年目となる今年は、外曲輪で仙台藩士が造営した土塁を確認したほか、虎口の南側では堀割を新たに検出することができました。

白老元陣屋は河川の流れを巧みに使用しつつ、その内側に土塁を築いた造営方法に特徴があります。特に虎口南の堀割は近世期の絵図面資料では描かれているものの、これまで実態が分からないままとなっていました。

堀割は10.0mほど幅を有し、深さは1.4mほどであることが分かりました。堀割の斜面の崩落を防ぐために打ったと思われる杭の痕跡も見つかり、大きな成果を得られた調査となりました。



写真左は堀割の幅で掘り終えた状況。手前の土塁からコーナーコーンまで10.0m以上あり、同様の幅で土塁に沿って広がっていた(矢印方向)と考えられます。

赤丸で囲んだ堀割の末端からは、写真右のように土留めのためと思われる杭の跡も見つかりました。

第2号 令和5年10月3日

仙台藩白老元陣屋資料館(白老町教育委員会)